

天明の頃我家の長臣渡邊松右衛門石町の豪富林治左衛門が許に至り、今此大家おとらへ、初鯉の振舞に逢ひし時、林が手代に價を尋ねければ、今日は安し、壹本貳兩貳分なりと云ひしとて、立ち歸りて我○岩瀬が父へ語りたるを、我等傍にありて聞きし事ありき、我父鯉を好まれしゆゑ、出入の魚屋常に持ち參りしが、初鯉は高價なりしが、秋の古脊に至りては、肥大なるも價二百孔に過ぎず、今は初鯉も貳兩三兩をなさず、古脊も貳百孔の物なし、いかなる故やらん

〔兔園小説七集〕金靈并鯉舟の事

ことし乙酉の夏のほど、鯉の獵のありしこと、むかしより多くあらざる事なりとて、右の房州の客の語るをきくに、○中壹ヶ處にて釣溜鯉の獵船を釣りためといふ十五艘、或は廿艘ばかりづゝも出づる、中にもあまつは二百艘も出づるよし、凡一艘にて鯉千五百本二千本位づゝ、六月六日比より同十四五日比は、毎日打續き夥敷獵のありし事、めづらしとてかたりしまし、筆のついでにゑるしおきぬ、

文政八乙酉初秋朔

文寶堂誌

鯉雜載

〔令義解三賦〕凡調○中 正丁一人、絹繩八尺五寸○中 若輸雜物者○中 堅魚卅五斤○中 煮堅魚廿五斤、堅魚煎汁謂熱煮汁四升、

〔類聚符宣抄三〕炮瘡事

太政官符、東海東山北陸山陰山陽南海等道諸國司令、臥疫之日、治身及禁食物等事、漆條、

一病愈之後○中 二十日已後、若欲喫魚、先能煎炙、然後可食、但乾鱸堅魚等之類、煎否皆良、乾脯亦

天平九年六月廿六日

〔延喜式七〕

踐七 祚大嘗祭、凡應供神御由加物器料者、神語雜號、九月上旬、申官差下部三人遣三國先大